

往古此邊は、千駄ヶ谷に屬する、北條家舊記に四谷は見えず、千駄ヶ谷の地名は見ゆ、江戸砂子に四ツ谷といふは、千日谷、茗荷谷、千駄ヶ谷、天上谷等の四谷あるゆへなりといふは非なり、四谷雜談にいふ、寛永の頃までは、外曲輪は所々に空地多く、就中御城西の方糺町の方に至りては、萩薄生茂り、野鷄墓のみ多く集りて、人のまれなる藪の内に、人家四つならではなかりし故に、其所を四つ家と云けり、其以後次第に家つゞきになるに隨ひて、自然に四谷と書成れるとぞ、

〔御府内備考四六十一〕四ツ谷は、略中事蹟合考に云、往古は今の尾陽公の表門の邊に民家一軒、坂町の上方に一軒、その外の所はさだかならざれど、二軒ありしより、嗚子高井戸の方より四谷と稱して往來のやすらひ所と云たりといひ傳ふと、此餘江戸砂子等に、昔四ヶ所の谷ありしより

起りし地名なりと書しは、全く文字につきての臆説にして、取べきものあらざれば省きて載せず、今四谷と稱するの大様、東は四谷御門御堀に限り、西は内藤宿追分に及び、南は紀伊殿御屋鋪及、鮫ヶ橋、千駄ヶ谷等に續き、北は市ヶ谷、犬久保に境ひたれど、地形多く犬牙して定かならず、又内藤新宿は、元四ツ谷の地なれど、元祿年中、新に宿驛を立られしより、御代官の支配となり、四ツ谷外の地となれり、

〔紫の一本上〕四ツ谷

麴町を西へ出て四ツ谷なり、麴町の十二丁目、十二丁目、今の四谷の見付の御門御堀に成たるゆへ、町屋引て御堀先にて替地を下さる、故に、麴町十二丁目、十二丁目は、四谷にあり、
〔江戸名所圖會九〕四谷大木戸又大關戸甲州及び青梅への街道なり、土俗云、霞が關或は旭の關共云とぞ、御入國の頃迄は、此地の左右は谷にて一筋道なり、此關にて往還の人を糺問せらる、近頃迄江戸よ、附出す駄賃馬の荷物送状なきを通さざりしとなり、今も猶駄賃馬の荷鞍なきをば、江戸宿又は、荷問屋等の手形を出して通るは、其遺風なり、此故にや、この番屋は町の持なれ共、